

(41) これと丁度同様の場合は普通回鶻語で書いたものといはるゝ十一世紀に編纂せられた *Kudatku Bilik* に於て認められる。此の書中には處々に Türk 語の名は見えるが、一回も回鶻語の名は見えぬ。然も多くの人の之を回鶻語と認める一つの理由はまた之が回鶻文字を以て書かれて居るによるのである。回鶻文字に就いての從來の考が更めらるゝならば、此の書を回鶻語で書いたものと見る説にも變動を與へて來ると信ずる。尤も十一世紀の Türk 語、即ち突厥といふ部族が支那の歴史に亡びてしまつた時代に於る Türk 語といふのを何と見るかについては自分は別に考を有するが、今は冗煩を恐れて其の問題には及ばない。

尙茲に引いた經典の奥書に見ゆる Türk 語といふものを突厥の語、さうして西突厥の語と主張するについても、種々立入つた考證論議を重ねる必要の存することは自分の千萬承知して居る所であるが、今は急に稿を終らねばならぬのと、また本誌の性質上讀者諸君の迷惑をも慮つて茲には略する。

* * * *

本稿は大正十一年秋、當地に催された大藏會の講演に多少の増補と省略とを試みたものである。所謂回鶻文の佛典の名稱に就いての考察に外ならぬものであるが、講演に掲げた題目をその儘之に用ひたに過ぎぬ。名と實との伴はぬのを疑ふ人もあらばと念の爲に斷つて置く。

(宗教研究第五年第十八號、大正十二年三月初二)